

石岡市東田中

つくばみらい市立十和小学校 作山智彦

### 調査の概要

東田中遺跡は、石岡市の南東部、霞ヶ浦の高浜入りに注ぐ山王川左岸の標高約20~25mの舌状台地上に立地しています。当遺跡では、公益財団法人茨城県教育財団によって1~6区の調査が行われています。1~3区では、縄文時代中期の竪穴建物跡（竪穴住居跡）や貯蔵用の土坑などがみつかり、台地縁辺部に集落が広がっていましたことが判明しています。また、マガキを主体とする地貝塚が1か所確認されています。

4区の調査は平成25・26年度に、整理は平成30年度に行われました。4区は斜面部で、縄文時代の斜面貝層（貝塚）1か所、土坑4基、遺物包含層3か所などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢・蓋・ミニチュア土器・有孔鍔付土器・台形土器・壺形土器）、土製品（土器片錐・耳飾り・土製円盤・土器片円盤・匙形土製品・垂飾り）、石器（尖頭器・搔器・削器・鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・石錐・凹石・砥石）、石製品（耳飾り・垂飾り・軽石製品）、骨角器（釣針・ヤス・ヘラ・鹿角加工品・垂飾り）、貝製品（貝刃・貝輪・垂飾り・加工品）、自然遺物（貝類・魚骨・鳥骨・獸骨・植物）などです。遺物は収納コンテナに約500箱出土しています。遺物の大半は縄文土器片で、貝塚から約28,000点、第2号遺物包含層から約110,000点が出土しています。



第1図 東田中遺跡と霞ヶ浦の広がり

（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2012年を改変）

### 主な遺構と遺物

約9,000年前から、縄文海進と呼ばれる海面の上昇が始まりました。この現象により、霞ヶ浦や周辺の低地には海水が浸入し、入江状の海が広がったと考えられています。海進の最盛期は縄文時代前期の約6,000年前で、海面は現在よりも3mほど上昇していたと考えられています。当遺跡の貝塚が形成された中期は海退している時期ですが、霞ヶ浦と山王川の合流点まで約1.5kmの距離に位置する当遺跡周辺の低地は、内湾の湾奥部だったと考えられます。

当遺跡の貝塚は、このような環境下で形成されたものです。出土した貝類は海水域に生息するものが大半で、主貝塚に分類されます。貝塚は斜面部の窪地に形成されているため、約25~35°の傾斜角で堆積していました。土器片や貝類などの遺物は、斜面部の高い場所から投棄され、斜面部の低い場所に堆積した結果、長軸約10m、短軸約8m、厚さ約2mの貝塚が形成されました。出土した土器から、貝塚は中期後葉（約4,500年前）のものと考えられます。

貝塚からは、38種類の貝類（貝製品を含む）が出土しています。集計作業の結果、最も多い貝類はマガキと考えられます。次いでウミニナ、ハマグリとなり、これらの貝類で全体の約75%を占めています。その他の貝類の組成は、シオフキが約7%，サルボウが約4%，カワアイが約3%，アラムシロが約3%，ナミマガシワが約2%，アサリが約1%，オキシジミが約1%などとなっています。このほか、汽水域に生息するヤマトシジミやヒロクチカノコガイ、淡水域に生息するカワニナやマツカサガイなどの貝類、貝層で繁殖した陸生のキセルガイやマイマイなどが出土しています。

### 貝類について

貝層ごとに最も多い貝種を集計した結果、マガキ主体層、ハマグリ主体層、ウミニナ主体層、ナミマガシワ主体層、シオフキ主体層が確認できました。貝層によって最も多い貝類が異なる理由として、入手しやすさ、貝を採る季節や場所、嗜好による意図的な採取などが考えられます。マガキやウミニナは主に泥質の干潟に、ハマグ

りは主に砂泥質の干潟に生息している貝類です。貝類の組成や古環境から、身近に広がっていた干潟で貝類を探っていた可能性があります。出土した貝類の大きさは、小形のものが目立っています。マガキ、ハマグリとともに2～3cmの大きさの殻が最も多く出土しています。

### 魚類・鳥獣類について

貝塚からは、台地上の遺跡では残りにくい骨類が出土します。当遺跡の貝塚でも、魚類、鳥類、獣類の骨や歯などが出でています。調査の際は、貝塚を掘った土を捨てずに土のう袋に収納し、水洗作業を行いました。その結果、小形魚の骨や微小貝類なども拾い上げることができました。これらの自然遺物は、当時の人々の暮らしを考える上で良好な資料となります。

魚類は、アカエイ、トビエイ、サメ、サメ・エイ類、ウルメイワシ、ニシン亜科、ニシン科（イワシカ）、サヨリ、メバル、コチ、スズキ、ブリ、アジ、クロダイ、マダイ、タイ科、シログチ、サバ、ヒラメ、カレイ、アイナメ、ボラ、ハゼ、ウナギの24種類が出土しています。身近な内湾から河口付近において、小形の魚を捕獲することを中心とした漁労活動が行われていたと考えられます。漁労具としては、釣針、ヤス状刺突具、土器片錘、石錘、浮子とみられる軽石製品が出土しています。釣針が少なく、土器片錘が多いことから、投網漁や刺網漁のような網漁が盛んであったと考えられます。

鳥類は、キジ科、カモ科、カラス科、クイナ科などが出でています。なかでも、キジ科やカモ科の骨が多く出土しています。

哺乳類は、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、イヌ、タヌキなどの骨が出土しています。イノシシの骨が最も多く、中でも幼獣が多いと考えられます。イヌは縄文時代に狩猟用として飼育されていたといわれています。イノシシやニホンジカの骨、角、歯などは、骨角器として利用されています。

### 調査の成果

当遺跡の貝塚の特徴として、小形の貝類が多く出土しているという点が挙げられます。小形の巻貝については、身を利用するだけではなく、出汁としても利用されたという説もあります。また、中期において内湾の奥部に形成された貝塚は、地点貝塚と呼ばれる小規模のものが多い中、厚さ約2mの斜面貝層が形成されたことも特徴の

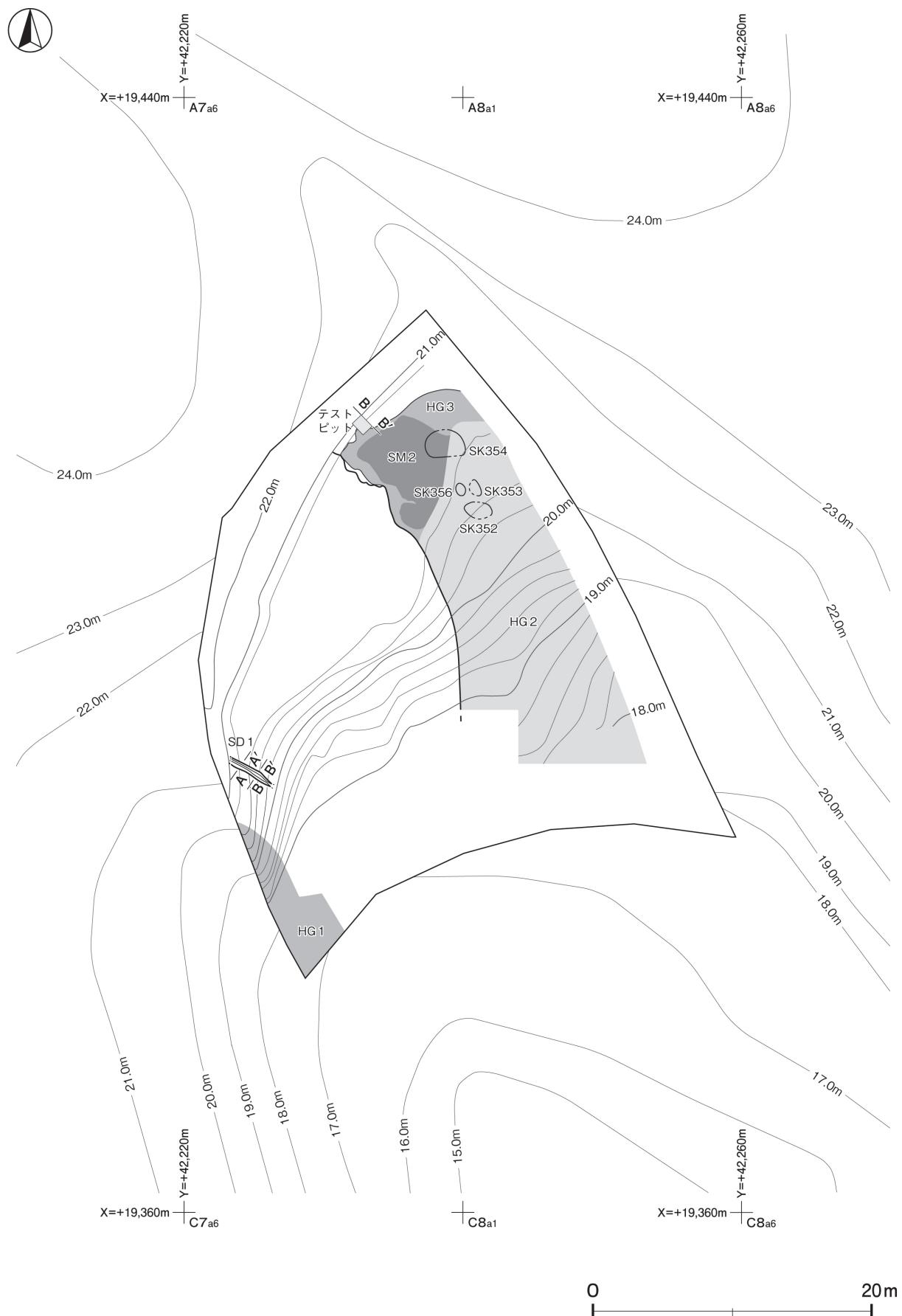
ひとつです。身近に広がっていた干潟で入手しやすかつたとみられるマガキやウミニナなどの貝類、湾内や河口付近で捕獲できた魚類は、当時の人々にとって利用価値の高い食料資源だったと考えられます。これらの水産資源や鳥獣類を安定して入手できる環境は、定住する上で重要な条件のひとつといえるでしょう。

今回の調査で、貝類、魚類、鳥獣類などの食料資源の利用状況がわかり、霞ヶ浦沿岸における漁労活動、狩猟活動、採集活動などについて検討するための資料を蓄積することができました。

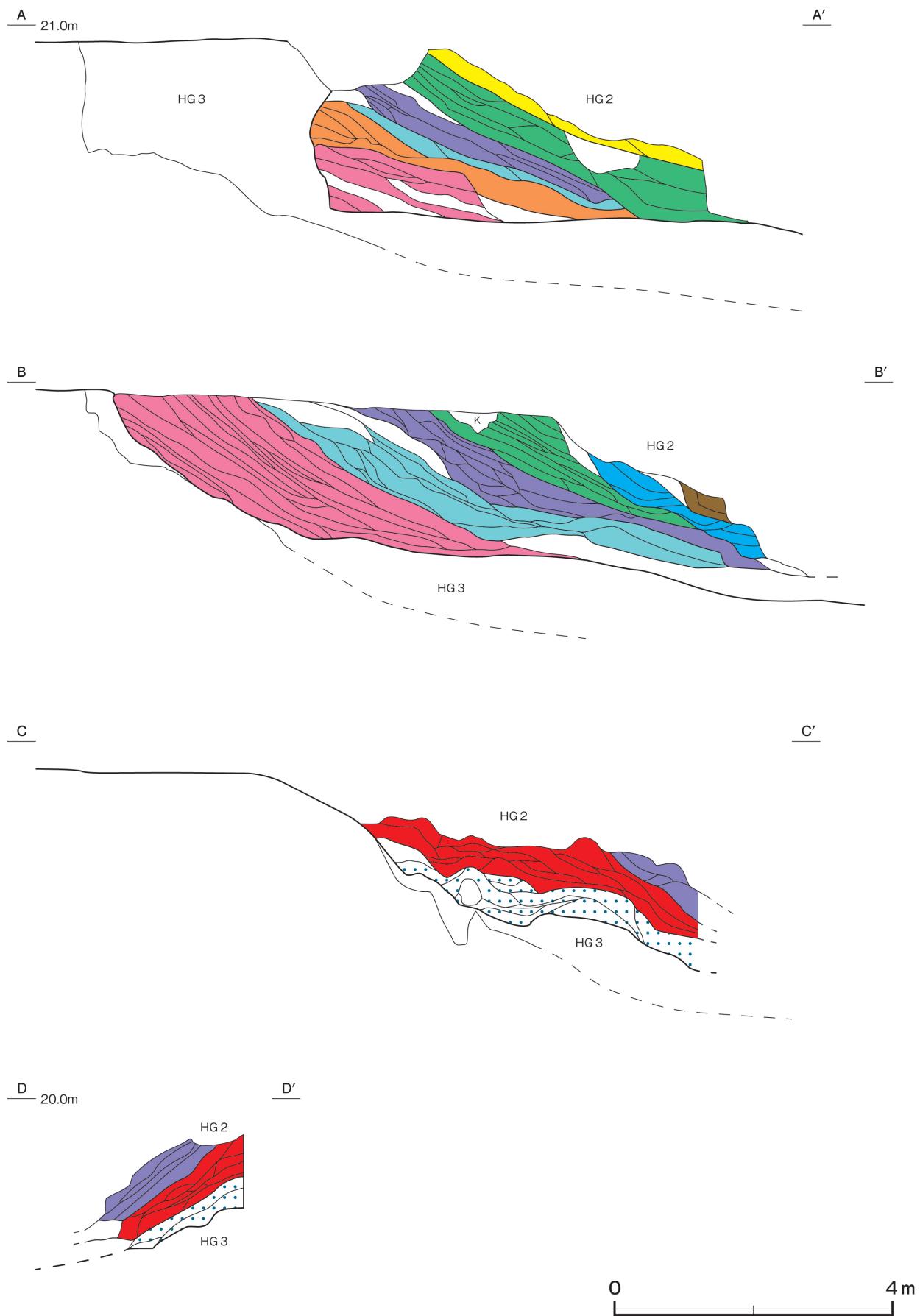
石岡市内では、宮平遺跡と三村城跡で中期に形成された貝塚が確認されています。それぞれ土坑内の覆土中に形成された地点貝塚です。カキやウミニナが多く、当遺跡における貝類の様相と類似しています。今後、霞ヶ浦沿岸において貝塚調査例が増加したり、当遺跡の今後の報告を踏まえた検討を行ったりすることで、当時の社会や生業の様子などにさらに迫ることができると期待しています。

### 参考文献

- 安藤敏孝ほか『宮平遺跡発掘調査概報』石岡市教育委員会  
1989年3月
- 石川功『海と河と縄文人—霞ヶ浦の古環境と遺跡—』上高津  
貝塚ふるさと歴史の広場 2012年3月
- 木村光輝・海老澤稔『東田中遺跡 中津川遺跡2 一般国道6  
号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）  
事業地内埋蔵文化財調査報告書8』茨城県教育財団文化財  
調査報告第407集 2016年3月
- 栗田功『三村城跡 一般県道飯岡石岡線道路改良事業地内埋蔵  
文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第299集  
2008年3月
- 作山智彦・見越広幸『東田中遺跡2 一般国道6号千代田石岡  
バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）建設事業地  
内埋蔵文化財調査報告書10』茨城県教育財団文化財調査報  
告第434集 2019年3月
- 関口満・亀井翼「霞ヶ浦の貝塚研究史」『霞ヶ浦の貝塚と社会』  
明治大学日本先史文化研究所 先史文化研究の新視点 V  
雄山閣 2018年2月
- 西野雅人「縄文中期の大型貝塚と生産活動—千葉市有吉北貝塚  
の分析結果—」『千葉県文化財センター研究紀要』19 千葉  
県文化財センター 1999年3月



第2図 東田中遺跡4区遺構全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第434集より引用）



第3図 第2号貝層実測図（茨城県教育財団文化財調査報告第434集より引用）